

サクラ標本寄贈に寄せて その6

跡見学園女子大学名誉教授

山崎 博子

元生物学研究室助手、第31期卒業生

井澤 栄子

第34期卒業生

中山 さとみ

第37期卒業生

伊原 佳奈

はじめに

桜は跡見学園女子大学のシンボルであり、新座キャンパスには構内全域にわたり多種類のサクラが植えられている。これらのサクラはある夭折された卒業生の御家族が、思い出のために、京都の佐野藤右衛門氏（第15代）の桜苗園から274本の苗木を取り寄せご寄贈下さったものに始まり、今でもその内の100本以上が開花している。その後、卒業生たちが寄贈したサクラもあり、早春から晩春、そして秋冬にも咲くサクラを楽しむことができる^{(1) (2) (3) (4)}。

1993年からサクラの同定調査⁽⁵⁾の一環として、サクラの枝を採取して標本の作成を開始し、2006年10月に標本100点を花蹊記念資料館に寄贈した⁽⁶⁾。2009年に17点⁽⁷⁾、2010年に3点⁽⁸⁾さらに2011年に3点⁽⁹⁾を追加寄贈し、収蔵庫内の全標本を、「サクラ標本寄贈リスト」として一覧表にまとめて『にいくら』No.17に掲載した⁽¹⁰⁾。ここまでの寄贈で新座キャンパス構内のすべての種類のサクラの標本が花蹊記念資料館に収蔵された。その後、標本に関する幾つかの動きがあり、この度、東京都立大学牧野標本館に寄贈され、そこで保管・管理されることになったので、一連の旧稿を受け最終編にあたるものとして記す。

1. 2016年2月に追加寄贈した標本について

2016年2月地域の方から、本稿で後述する学外の企画展に跡見のサクラの標本を展示したいとの要望があり、これに応えるため学外展示用として、新たにサクラの標本8点を花蹊記念資料館に追加寄贈した。この8点は【表】と【図1】、【図2】に示す。

【表】2016年2月に追加寄贈した標本の種類

種類	和名	資料館登録標本番号	花・葉	個体番号	収蔵棚番号	採取年月日	植栽年
野生種	オオシマザクラ	ATOMI 0126	葉	149	C-11	2010.06.17	1965
栽培品種	'ウコン'	ATOMI 0129	花	68	A-03	2004.04.09	1965
		ATOMI 0130	葉	68		2002.06.26	
	'オオカンザクラ'	ATOMI 0124	花	168	D-08	2011.03.19	2006
		ATOMI 0125	葉	168		2009.06.15	
	カンザクラ'カンザクラ'	ATOMI 0118-2	花	171	D-09	2010.02.24	2006
	'ミクルマガエシ'	ATOMI 0127	花	179	D-10	2009.04.06	2006
ATOMI 0128		花	179	2009.04.06			

ウコン（鬱金）（個体番号68）は保健センター脇にあり、ひと際人目を引く黄色い八重の花が咲く樹であった。樹勢回復治療を行っていたが⁽¹¹⁾【図3】、コロナ禍で手当も行き届かず、2022年12月に枯死しているのに気づいた。この樹はなぜか根元近くで二又に分かれ、一方の樹幹には八重咲きの黄色のウコン【図4】が、もう一方には一重の純白の花が咲いていた。この不思議な二又の樹のことを知りたいと考えたのが構内のサクラを同定するきっかけとなったことは既に『跡見学園女子大学 人文学フォーラム』3号に記している⁽¹²⁾。

白い花が咲く樹は、今回、葉の標本を寄贈したオオシマザクラ（個体番号149）である。1965年の大学開学当初に導入した苗木のウコンの台木だったものが、穂木と合体して成長したものである。この樹は健在で、白い花の香りも楽しむことができる。このウコンは枯れたが、標本は美しい姿と多くの情報を伝え続けることであろう。なお、このウコンから2002年に樹木医・池本三郎先生（元自然観察の森園長）が接木増殖した後継樹（個体番号166）が花蹊メモリアルホール南側の通路に植栽され⁽¹³⁾、親木と同様に咲き始



【図1】2004年以前に採取作成した標本
（左）ウコンの葉（右）ウコンの花



【図2】 2009年以降に採取作成した標本
 (1)オオシマザクラの葉
 (2)カンザクラの花
 (3)オオカンザクラの花
 (4)オオカンザクラの葉
 (5)(6)ミクルマガエシの花
 撮影：本学事務局長・渡邊泰教氏
 (2023年2月23日)



【図3】 ウコン（個体番号68）
 (ウコンは樹勢回復治療中のため樹幹に黒色の包帯が巻かれている)



【図4】 ウコン（個体番号68）
 撮影：中山さとみ（2015年4月15日）



【図5】 ミクルマガエシ（個体番号179）
 撮影：中山さとみ（2019年3月31日）

めの淡黄色から最盛期を過ぎると淡紅色を帯びてくる華麗な花が楽しめる。

オオカンザクラ（大寒桜）（個体番号168）については『にいくら』No.16に詳細に記した⁽¹⁴⁾。その後の状況についても『にいくら』や『跡見校友会一紫会五十年史』に紹介した^{(15) (16)}。

また、カンザクラ（寒桜）（個体番号171）についても『にいくら』に記した^{(17) (18)}。このカンザクラは2021年までに枯死していたが、2022年2月、田中秀明氏（元日本花の会結城農場長・樹木医）が接木増殖した苗木が大原隆明氏（富山中央植物園）から寄贈された。それは教務課前のグラウンドに有限会社金子造園の協力により植えられている。

ミクルマガエシ（御車返し）（個体番号179）は2002年の校友会一紫会からの寄付金により、2006年に植栽された⁽¹⁹⁾。コマツナギ（駒繫）（個体番号127）と並んで大きな花が咲き、花弁は淡紅色を帯びている【図5】。

2. サクラの標本の活用

(1) 跡見学園女子大学の企画展での展示

サクラの標本は、秋の大学祭や春の「桜まつり」の開催時期に合わせた企画展で一般公開されてきた。

さく葉標本が初めて公開されたのは大学開学40周年にあたる2005年の秋で、花蹊記念資料館で開催された「跡見学園女子大学の桜」と題する企画展である。さく葉標本（押し葉標本）と液浸標本とが10種類ずつ展示公開された^{(20) (21)}。

さらに、2007年の秋には、企画展「サクラの記憶 生きつづける標本の魅力」が同館第2展示室で開催され、サクラ全標本の中から選りすぐりの美しい10種類が、サクラに関わる写真や解説と共に紹介された。サクラ関係の研究者からも良く工夫された展示から学術的な情報が得られ、構内のサクラの美しさも堪能できたと同好であった^{(22) (23)}。

2012年の春には、花蹊記念資料館・図書館共催事業「桜の本と標本展」が開催された。図書館展示室では、サクラのさ

く葉標本9種類と液浸標本8種類が解説文や資料も添えて展示された。なお、学生も加わって傷んだ樹を治療し、それを記録した治療記が同時に展示された⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾。

さらに同年、文京キャンパスで開催されたオープンキャンパスの折に、6階のスケルトン教室と7階に通じる大階段を使用して開催された文京キャンパス出張展示「十一月には十月桜が咲く!」の際は、同定調査に関連して撮影した写真と資料の展示に協力した⁽²⁶⁾。

(2) 地域の企画展での展示

2016年の3月には、東武東上線志木駅に直結する新座市生涯学習複合施設「にいざほっとぶらざ」の「さくら展」で、花蹊記念資料館から特別に美しいサクラの標本6点を選び貸出した。

この「さくら・さくら～さくら展」の会場では、標本に加えて『跡見学園女子大学の桜 構内サクラガイド』からピックアップした解説と『にいくら』No.12、13、14、15、16、さらに、日経新聞NIKKEIプラス1^(※)(大学の桜名所東日本1位として跡見学園女子大学が紹介された)も展示された。主催者の宮崎直子氏の創意工夫を凝らした展示により、標本は優雅で美しく生きたサクラのように見えた。見学者からは「適期のサクラの枝から標本を作成すると、花や葉は細部までも鮮明に見えるのね」と称賛された【図6】。

2019年3月には、和光市民文化センターサンアゼリア展示棟「サンアゼリアでお花見を～さくら展～」の学術展示作品として花蹊記念資料館のサクラの標本を展示したいとのことで、標本の貸出しに代えて、標本の作成者たちが撮影した標本の写真を貸出した。宮崎直子氏が力を注がれた展示は素晴らしく、「跡見学園女子大学へお花見に行こう」と誘い合う声を耳にした。サクラの標本は本学の広報活動の役割を果たしていた。

学外でのこれら企画展の開催期間は跡見の「桜まつり」の開催日時を含むように計画されているので、来場者の跡見学園女子大学への関心を一層深めるのに役立った。



【図6】「にいざほっとぶらざ」でのサクラの標本の展示
撮影：ぶちぶんか村編集長・宮崎直子氏
(2016年3月1日)

3. 東京都立大学牧野標本館へのサクラ標本の寄贈

(1) 寄贈の経緯

同定調査の一環としてサクラの枝を採取して標本の作成を開始し、2006年10月に標本100点を花蹊記念資料館に寄贈した。その後追加寄贈したものを合計すると収蔵庫のサクラの標本は130点になる。しかし2013年4月、標本の管理・保管には限界のあることから花蹊記念資料館から学外への寄贈を要請された。山崎は幾つかの博物館や標本館に問い合わせたが、当時は収蔵庫に余裕がなく、寄贈先を見つけるのは極めて難しかった。

2023年1月、新宿歴史博物館で開催された牧野植物同好会顧問・加藤偉重博士(獨協大学名誉教授)の講演を拝聴した折に、加藤博士に跡見のサクラの標本を牧野標本館別館へ寄贈したいと相談したところ、牧野標本館・館長の村上哲明教授に寄贈受入を相談することをご教示いただいた。村上教授にお願いしたところ、ご快諾をいただけたので、跡見学園女子大学事務局長・渡邊泰教氏(現在は学校法人跡見学園 法人事務局長)に、資料館の収蔵庫内の全標本の寄贈の件を相談したところ、花蹊記念資料館長をはじめ学内での了承が得られたので、懸案になっていた標本の学外寄贈を実施する運びとなった。

(2) 寄贈の実施

2023年3月7日、跡見学園女子大学・事務局長渡邊泰教氏のご協力のもと、資料館の収蔵庫内の全標本を東京都立大学牧野標本館長・村上哲明教授へ「標本リスト」に『跡見学園女子大学の桜 構内サクラガイド』を添えて持参し、受領していただいた。標本は牧野標本館別館で持田幸良博士と大学院生・甲田龍太郎氏に受入れていただいた。その後、持田博士の案内で標本収蔵庫のシーボルトコレクションの標本や牧野富太郎博士の標本を拝見させていただいた。

(3) 牧野標本館でのサクラの標本の位置づけ

牧野標本館別館TMUギャラリーで『日本の植物学の父』牧野富太郎が遺したものと題する展示が開催され、2023年8月17日と9月23日に見学した。この中には「牧野標本以外の寄贈標本」と題した展示パネルがあり、そこには「跡見学園女子大学花蹊記念資料館からのサクラのコレクションなどがあり、いずれも個性的で貴重なコレクションばかりです」の文章で紹介されていた【図7】。

この情報発信により、見学者の方々の「跡見学園女子大学新座キャンパスへ多種類のサクラを是非見に行きたい」との声が聞かれた。サクラの標本は来場者から跡見学園女子大学や花蹊記念資料館への関心を引き寄せるのにも役立つと思われる。

今後、跡見のサクラの標本は、牧野標本館の収蔵庫で未永く安全に保管管理され、文系ではなく理系の分野で、多くの学術情報を含む資料として、植物系統分類学や関連分野の研究に有効活用されるであろう。

このようにサクラ標本の学術的な活用が可能になったのは、花蹊記念資料館で手厚く保管管理されて来たからこそであり、牧野標本館のスタッフからも標本が美しく丁寧に作成され、その保存状態も大変良かったとお褒めいただいた。跡見学園ならびに花蹊記念資料館に、ご高配とご厚情を賜り、心より感謝申し上げます。

おわりに

2023年の紫祭（大学祭）のテーマは『桜華～繋がりを紡ぐ～』であり、パンフレットの表紙に「学内には冬桜が咲くこの時期、是非ご覧あれ」と記している。また、花蹊記念資料館では企画展『没後80年跡見玉枝』（会期9月28日～12月8日）が開催された。11月には、日本櫻学会会員の方々が会員の山崎から情報を得たのと資料館で跡見玉枝の絵画などを見学されたとお聞きした。

著者たちは、跡見のサクラを大事にしたいとの思いで同定調査や標本作成に努め、日本櫻学会の研究発表会では作成したサクラの標本の写真を使用して研究結果を発表してきた⁽²⁷⁾ ⁽²⁸⁾。また、跡見学園女子大学主催の「桜まつり」に活用される『跡見学園女子大学の桜 構内サクラガイド』の作成に協力してきた⁽²⁹⁾。2024年春には久しぶりに「桜まつり」（第16回）の開催が予定されている。跡見学園女子大学に、微力ながらお役に立てたことを幸いに思う。

跡見学園女子大学のシンボルであるサクラは大学と歩みをともし、学生の未来に向けて美しく咲き続けてゆくことであろう。

そして同定調査の一環として作成し、牧野標本館に収蔵していただいている跡見のサクラの標本は、新座キャンパスの桜とそれに関わった人たちの思いを未来永劫、多くの人々に熱く物語がってくれる証人となるであろう。

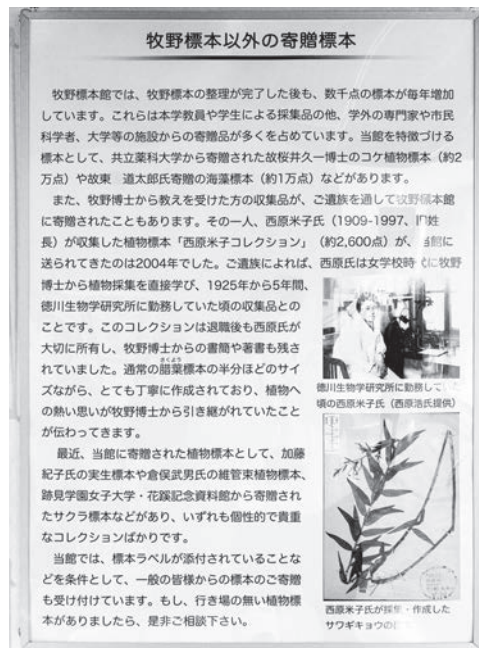
謝辞

サクラが取り持つご縁で多くの皆様から賜ったご厚情に心より御礼を申し上げます。

さらに、本稿作成にご協力くださった大原隆明氏に篤く感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 伊藤嘉夫「跡見学園開学縁起（二）―校庭の桜樹―」（『跡見学園女子大学学报』第3号、昭和56年（1981年）2p）
- (2) 山崎博子、大原隆明、堂園いくみ「跡見学園女子大学におけるサクラの同定調査」（『跡見学園女子大学文学部紀要』第37号、平成16（2004）年76p）
- (3) 山崎博子「サクラ標本寄贈に寄せて」（『にいくら』No.12、平成19（2007）年9p）
- (4) 山崎博子「跡見学園女子大学新座キャンパスの桜」（『さくら百科』丸善株式会社、平成22（2010）年314-317p）
- (5) 前掲書（2）75-88p



【図7】 牧野標本館別館TMUギャラリーに展示されていたパネル
撮影：坪田剛氏（2023年8月17日）

- (6) 前掲書 (3) 9-18p
- (7) 山崎博子「サクラ標本寄贈に寄せてーその3ー2008年以降に作製・追加寄贈した標本」(『にいくら』No.15、平成22(2010)年 1口絵 14-16p)
- (8) 山崎博子「サクラ標本寄贈に寄せてーその4ー2010年に作製・追加寄贈した標本」(『にいくら』No.16、平成23(2011)年 1口絵 13-16p)
- (9) 山崎博子「サクラ標本寄贈に寄せてーその5ー2011年に追加寄贈した標本」(『にいくら』No.17、平成23(2012)年 1口絵 9-12p)
- (10) 前掲書 (9) 24-27p
- (11) 山崎博子「『跡見学園女子大学の枝垂れ観察・治療記』について」(『にいくら』No.14、平成21(2009)年 27-29p)
- (12) 山崎博子「跡見学園女子大学のサクラに関する研究 その1」(『跡見学園女子大学 人文学フォーラム』第3号、平成17(2005)年 84-85p)
- (13) 山崎博子「サクラ標本寄贈に寄せて その2ーサクラに関する基礎資料ー」(『にいくら』No.13、平成20(2008)年 4p)
- (14) 前掲書 (8) 14p
- (15) 前掲書 (9) 10-11p
- (16) 山崎博子「跡見の桜を想う」(『跡見校友会一紫会五十年史』編集・発行 跡見校友会一紫会 平成30(2018)年 96p)
- (17) 前掲書 (7) 14-15p
- (18) 山崎博子「JR国立駅のカンザクラ(寒桜)跡見で開花」(『花の友』No.113、平成23(2011)年1月 編集・発行 公益財団法人日本花の会 11p)
- (19) 前掲書 (13) 4, 12-13p
- (20) 「第5回企画展 跡見女子大学ー四十年の歩みー」(『にいくら』No.11、平成17(2005)年 25-26p)
- (21) 山崎博子「跡見学園女子大学のサクラに関する研究 その2」(『跡見学園女子大学 人文学フォーラム』第4号 平成18(2006)年 145-153p)
- (22) 前掲書 (13) 5-6 p
- (23) 「第5回企画展 サクラの記憶 生きつづける標本の魅力」(『にいくら』No.13、平成20(2008)年 26p)
- (24) 前掲書 (12) 82-84, 90p
- (25) 前掲書 (16) 96p
- (26) 倉石あつ子「展示室と収蔵庫をいかにつなぐかー学芸員のお仕事」(『にいくら』No.18、平成25(2013)年 11p)
- (27) 山崎博子、井澤栄子、中山さとみ、伊原佳奈「跡見学園女子大学新座キャンパスに於けるサクラの落葉図鑑」(『櫻の科学』第15号 日本櫻学会 平成23(2011)年 41p)
- (28) 前掲書 (9) 11-12 p
- (29) 山崎博子、大原隆明編『跡見学園女子大学の桜 構内サクラガイド』初版平成16(2004)年～第15版令和2(2020)年
- (※) 2016年2月27日(土)「日本経済新聞・プラス1」の何でもランキング「大学のさくら咲く名所を歩きたい」にて、跡見学園女子大学新座キャンパスが東日本1位に選ばれた。